

Title	<書評>山口勝弘著 「環境芸術家キースラー」 1978年2月 美術出版社
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 1979, 18, p. 123-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53719
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山口勝弘著

「環境芸術家キースラー」

1978年2月 美術出版社

本書は、著者のキースラー論というよりは、フレデリック・J・キースラー(Frederick John Kiesler 1890—1965)の伝記である。建築、舞台デザイン、展示デザイン、家具デザイン、彫刻、絵画、詩といった多領域にわたるその実験的活動を通して、彼の全体像をほりおこし、生涯追求しつづけた〈エンドレス〉というその基本的フィロソフィの理論的展開と具体的な提案の今日的な意義を訴えようとするものである。

本文は、キースラーの仕事に即して通時的に構成され、時代的背景の説明のほかは、著者自身の考察は読者の理解を助ける程度にしか加えられていない。従って、われわれにとって最も感心のあるところは、キースラー自身の多領域な活動とそれらを貫いている連続性の論理である。なかでも、彼のデザイン理論の中核をなす〈CORREALISM〉の理論的 pursuit と近代機能主義批判の実践的活動は、その先見性において、今日の機能主義に関する論義をはかるに凌ぐものであろう。

1930年代、バウハウスを中心とする近代機能主義が、国際様式を旗印に、ようやく本格的な社会性をもつに至った頃、すでにキースラーは、所謂機能主義的デザインの中には、何ひとつ新しい機能が生れていないことを見ぬき、住宅は、それをを使う側の生活のダイナミズムで肥え、使用機能について、空間と時間の相関関係による解決方法を設計上に反映させるべきであると主張する。〈エンドレス〉の概念の追求から生れた〈空間の家〉は、彼のこの主張を具体的に示すものであった。単に機能主義を批判するだけでなく、それを越えるものとして具体的に示された〈CORREALISM〉理論は、今日のわれわれにとっても大変示唆に富むものである。

キースラーは、人間を、集まった力の核として把える。力は、人間に働きかけると同時に、人間も力に働きかける。力はエネルギーであるから、人間はエネルギーの核として活動する。人間と環境(人間環境、自然環境、技術環境)との間に働く力(協力、排除、闘争)が視覚的に見える形となったものを、一般的に「物質(matter)」と呼ぶ。それらが現実(reality)と解釈されているものを構成しているとする。しかし、物質は現実の一表現

であって、現実そのものではない。現実がこのような表層的に解釈される理由は、宇宙に働く諸力の関連についての人間の感覚に限界があるからであると指摘している。

哲学者中村雄二郎は、最近の著書「共通感覚論」（岩波現代選書27）の中で、ルネッサンス以来、五感の階層秩序のなかで聴覚と視覚の位置が逆転し、視覚が優位化したことを明らかにしている。そして、近代文明は、触覚と切りはなされたかたちでの視覚優位の方向で展開されたとしている。機械論的自然観や、時間も空間もすべて量的に計り得るものだとする考え方が、このような視覚優位の立場に立つものだとすれば、表面的な装飾や形態にその中心的な関心を置いた所謂機能主義もやはり視覚優位の幻影であったのではないか。

視覚が優位に立って独走している時代にあって、その限界に気づき、第六感、あるいは、諸感覚の体性感覚的統合を追求していたように思えるキースラーは、その極めて触覚的な作品を通して、このことを訴えていたのではないか。

また彼は、その理論的展開において、われわれが〈form〉と呼んでいるものは、それが自然のものであれ、人工のものであれ、ゆっくりと変化する、統合力と分解力の可視的な交換の場であるにすぎないという。現実には、可視的形態と非可視的形態の内に常時作用し合っているこれら二つのカテゴリーの力から成っている。この相互に作用し合う力の交換を、彼は〈CO-REALITY〉と呼び、この関連性についての科学を〈CORREALISM〉と呼ぶ。そして、この〈CORREALISM〉という言葉は、人間とその自然環境および技術環境との間の連続的な相互作用のダイナミズムを表わしている。このことは、われわれが、以前「機能」について考えたとき、三木 清のいう成全的行動と、人間とそれをとりまく環境との間の循環的相互作用などから新しい機能概念を引き出したことと非常によく似ている。

キースラーは、人間と環境との間におけるこのような関係を、生物学の遺伝と環境という概念の関係から捉えながらも、人間にとって重要なのは、自然が胚細胞内に与える密封された命令としての遺伝子ではなく、子供が親から受けつぐことのできる唯一の人間としての経験、訓練と教育による慣習や習慣などの社会遺伝であるとする。彼が、ただ人間だけが持っている技術的環境に注目し、それを構成する道具を幅広い意味で捉え、道具のデザインに際して、それを発生論的に追跡し、根源的な概念を把握しようとするのは、技術的環境が、生命の範囲を越えて、人間の発展に影響を及ぼし、その技術自体は発展のなかで遺伝の法則に従うと考えるからである。そしてまた、人間が道具を用い、技術環境をつくりだした原因を、人間の生存に対する要求に見出し、技術環境のデザイナーにとって重要なことは、要求の定義であり、それは、既存の道具としての建築物の研究にもとづ

く考察ではなく、人間の研究にもとづくものでなければならず、要求は静的なものではなく、進化すると指摘する。それ故、諸要求を再定義し、それを基礎として、技術環境を再組織することがわれわれに課せられた義務であると考えた。普通に考えられているように、現実的な要求が、技術的变化や、社会・経済的な変化に対して直接的な動機となるものではなく、要求が進化するのであり、その進化は、人間の構造とその環境の核的性質にもとづいている。人間の究極的な要求は、肉体的、精神的に健康を維持、増進することである。技術環境を通して、人間環境、自然環境をコントロールし、環境をコントロールすることによって、環境の健康をコントロールするのではなく、人間と社会の健康をコントロールするのである。

キースラーは、機能を静的なものと考えてはいない。環境と人間との相互作用、そして、この相互作用の新たな可能性への進化は、環境の直接的な成果ではないとする。人間に内在する力の潜在的可能性を見だし、その力と環境との相互作用のなかに生れるものに、新しい意味としての機能の発生を見る。そして、いかなるformも、それ自体では不完全であり、可視的ないしは非可視的に、あるいは、随意的ないしは不随意的に、それが放射するものによって確認されるという。

彼によれば、デザインは、一つの個体を限定することではなく、一つの明確な人間的目的に向けて慎重に、自然の諸力に極性を与えることである。これを彼はデザインの科学〈生技術(Biotechnique)〉と呼ぶ。この生技術的なアプローチによるデザインは、所謂機能的なアプローチによるデザインとは、その展開の仕方、および、結果において、根本的に異なる。

CORREALISMとBiotechniqueの理論的実践は、1937年の秋、コロンビア大学の建築科に設けられた〈Laboratory of Design-Correlation〉での〈動く家庭用の本棚〉の設計と試作を通して紹介されている。

前記のように、キースラーは、視覚優位のまっ只中にありながら、不可視的な力やエネルギーを問題にし、建築をまず劇場としてとらえ、劇とは、人間の日々の生活の中に起るハプニングの連続の中に考えられるものとした。つねに住む人の側に立って建築を考えた彼が、本来連続的であるわれわれの生活から出発して〈エンドレス〉という新しい建築概念を組み立てたのは必然的であったといえる。また、何ごとをするにしろ、日々の生活から始めようとする時には、われわれは、体験的、受動的、あるいは、触覚的、体性感覚的であらざるを得ない。このことから、彼の作品の多くが、舞台と客席の区別のない演劇空間となり、床、壁、天井の区別のない家となったのも当然であったと考えられる。それは、単に視覚によってすべてを認識できるものではなく、むしろ第六感をも含めた体性感

覚的統合が要求されるのである。それだからこそ、彼は、つねにアウトサイダーとしての立場を守り通すことができたのであろう。そしてまた、人々が、人間という統合的存在にとって、触覚、心の触合いの必要性を強く感じ、パフォーマンスという言葉が、劇場の舞台や音楽ホールでの演劇や、舞踊や、音楽に限らず、生活空間における行為にまで拡大して用いられようとしている今日、その先見性は高く評価されるべきである。生活優先を標榜するわれわれに対して、一つの具体的な実践の方法を示すものとして、本書のもつ意義は大きい。

(京都工芸繊維大学 増山和夫)